目次

▲論說
岐蘇林友を如何にすべきか
▲感想
節穴から覗いて
▲調査
南滿州旅行片々
白髮山保護林
▲文苑
稽程一千日
山、山、山
二學年修學旅行日誌
和歌
▲雜報
片、々

大正五年八月二十五日　第八拾貳號　（毎月廿五日定期刊行）（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

論說

岐蘇林友を如何にすべきや

丸山岩吉

吾校友諸兄の林友改善に關する意見が、ぽつ〳〵本誌上に現はれるやうになつて來た。僕の讀み得たものは、昨十二月號綠山坊兄の『御即位の大典を記念し林友の改善を望む』及本年一月號マダキ迂史兄の『林友誌寸感錄』の二篇であつた。

事實に於て林友の現狀に全き滿足を感じつゝある人は少い。こは想像上容易に知り得た事實である。何故なれば、吾相語りし校友諸兄のうちに於て、これより全き滿足を感ずつゝあつたものは一人もなかつたから。然してこれ等の人々のみが此種の人達でないことを思惟し得たから。

不滿の感よりして改革が起る。しかし改革々々と騷いで見た所で、根據なき又目的なき改革は成り立ち得ない。少くとも改善を口にする以上、その本來の性質及目的と現狀とを完全に理解し、その間の距離を探求し、而る後この距りを可成近づけ得べき最良の方法を發見し、それが具體的方案を構成して、始めて改善の事業に着手すべきである。

僕はこれより獨斷と偏見とを恐れつゝ、これ等の諸問題に就いて概略の攻究をして見ようと思ふ。

一、校友會の性質と林友

木曾山林學校々友會といへば、いふ迄もなく木曾山林學校に關係ある人々によつて組織せられた一團結の名稱である。

しかしこの團結は、他の利害の一致より來る團結などゝ、自ら異つた性質を有すべきである。即ち團結のよつて生ずる根本の理由を異にして居る。僕はこれを人間自然の性情によつたものであると解釋したい。現在の事實は形式的、壓制的な傾向が多分に存して居るとはいへ、その原始に遡るとき、僕は唯これのみを見出すべきであることを思ふ。こゝに言ふ人間自然の性情とは人間が故郷を愛し親を愛すが如く、其の母校を愛し、その鄰人に親しみを感ずるが如く、自己に關係ある人々に親しみを感ずようとする、その二つを指すものである。

その結果母校を中心とし、幾多の校友との間に、太い愛の絆が結ばれる。しかしてその個々の校友相互間に、細い親しみの繫きが生ずる。この有機体的關係を持つた團結、それが吾校友會である。尙この團結を生ずたものゝうちに、その團結によつて何等かの力を享受しようとする、欲求のやうな又憧憬のやうな一つの情緒がからみついて居つたかも知れない。

兎に角校友會の創始といふものは、かゝるものであらねばならぬ。こゝに於て起る

問題は、かゝる團結が個人々々の實際生活の上に、幾許の力を投げ得べきや。といふこの種の團結の死活に關しさうな問題である。僕はこれに關して何等の說明解案を下すことが出來ない。僕の現在が、この種の問題に悶みつゝあるものであるから。しかしこれ等は、人間のあらゆる生活を唯バンとふ問題にのみくつつけて見ようとする、愚人の努力であつたかも知れない。

校友會の性質が以上の如きものなる以上うの要素といふべきものは自ら明らかでならねばならぬ。個々の校友なしで校友會の成立しないは自明の理なるが如く、その間を結合する愛の絆なしで校友會は組織せられない。校友會の鞏固發展は、校友の數の增加といふこと以外、校友各自の自覺によつて、この愛の絆を確實に所有し且うれしも一層大にしようとする努力に俟つべきものである。

校友會が、かゝる理由の下に創立せられたものなる以上、その目的も亦自ら明らかであらねばならぬ。校友會の主要の目的とする所は、各員各自の親密を計ることの一事に歸せらるべきである。この外の事柄は唯この目的を遂行する爲めの手段と見做されるべきである。

まだ說き足らぬ點はあるが、あまり長きに渉るを恐れるが故に、僕はこれから林友に就いての卑見を些か述べようと思ふ。

前述の如き校友會の目的の遂行に關して最有力なる、然して唯一の機關は、吾岐蘇林友であることを思ふ。何故なれば、うの他の校友會の事業といふ事業は、唯學校内にある校友間、即ち限られたる範圍内に於てのみこの目的を果むつゝあるからである。事實吾四百の校友中うの大半は帝國各地に散在して居る。これ等に向つて、校友會の機關として、唯一の存在權を有むつゝあるはこの林友である。

二、林友の目的と其形式

林友の性質が前述の如きものなる以上、林友そのものの目的も亦自ら其内に存在してある。即ち吾四百の校友各自をして、うの母校を愛し校友を愛するの情を確保せしめ、且これをより强烈にし、うゐして各自の本質的欲求を滿足せしむると共に、この校友會をしてより强固なる團結にしようとする目的の下に發刊されるものであらねばならぬ。

こゝに思ひを潛めて攻究すべき一項事は、岐蘇林友の發刊てふ一項事が何故この目的を遂行し得るや、即ちかの相愛の情を確保し高めることを何故助成し得べきやといふ問題である。僕一個の淺見よりすればこの問題は肯定して差支なきものなることを思ふ。凡う人間は愛しよう、而してうの愛を永久に保たう、といふ欲求があつたにしても、相距たること遠いに隨つて次第々々に疎遠に流れ、その間些の愛の流れも存在しなくなるが如く見られるに至る。眞に自覺あり徹底した要求ある人間であつたならば、そんなことは或はなかつたかも知れない。しかし普通一般の人々はかゝる傾向を多分に具備して居る。林友はこの相距たるといふことを防遏し將又、愛の命脈を保たしめるといふ所に大なる意義を有する。又人は相互交換といふことによつて、その愛を高める傾向を多分に持つて居る。林友はこの性情を培ふに至大な効力がある。林友が校友會の機關雜誌として發刊せられる抑々の理由は、此の間の消息を自覺した結果であらねばならぬことを僕は思ふ。

目的論を此丈で打切ることは嘘である。世の中の新事業なるものが破綻したは、他にも多くの原因はあつたらうけれど、うの目的乃至理想を此丈に留めて置かたの缺陷からして生じたことが決して少くなかつた何故なれば此は單なる提唱に過ぎないから吾々は更に進んで、うの具体的に見せられた實行上の形式を持つべきである。しかしこは頗る難しいことである。僕の如きに於ては到底これを周到なる一構成として見せることは不可能である。

まづ林友うのものが、校友各自の徹底した自覺の下に發刊されて居らねばならぬといふ林友死活に關する最大問題がある。これは畢竟各個人上の問題で、他人に於てどうする目的の下に發刊されるものであらねばならぬ。

することも出來ない。唯これに刺擊を與へることゝ丈は出來る。しかしうの刺擊が幾許の効果を奏し得べきやといふことは素より不定の問題である。この林友が幾許の自覺内容を以て發刊されたかは、その當時の事情を全く知らない自分には全く判らない。

林友の目的の遂行上、林友の月刊なることは必要である。何故なれば、發行から發行迄に長い期間を有しないが故に、人々の心に弛みを生ずることを匡救し得るから。

林友の内容、そは人々主觀の問題である。以上幾多の見解を生ずべきである。以下これに關する僕一個の意見を畧述して見よう思ふに精細なる科學上の研究や、精密なる林業上の經驗やを掲載することは、勿論必要なることに相違なからうけれど、うれにのみ傾くことは林友誌そのものをして片苦しい無趣味なものにして了ふ恐れがある。これ等から趣味らしい趣味を感得し得ないやうな人間が、どうして現代社會に立つて確たる歩みをなし得ようや、と反駁されるかも知れない。しかる時僕は口を噤む。實際僕はかゝる問題に對して甚しい疑問と苦悶とを抱懷しつゝあるが故に、何等之に就いての辯解をなし得ない。

次に所謂才子達の手になつた美しい詩歌文章の掲載であるが、これも決して望ましいものではない。事實此等内容の空疎な、唯美辭寶典たるに過ぎないやうな文章は、作者うの自身に取つては何等かの意義と價値とを或は有してあつたかも知れない。けれ共他人即ち第三者の上には些の意義共鳴を與へ得ないものである。しかし僕は文章詩歌の掲載を全く擯斥し去らうとするものではない。寧ろ之を歡迎する。唯似而非文章の掲載を嫌ふといふ丈である。かく言ふ時は文章論の内容に迄立ち入らなければならなくなる。しかしこゝにはその餘裕を持たない。唯何等かの形に於て吾人の生活に觸れ來るものに非んば文章詩歌てふ名をうが爲めに惜むべきである、といふこれ丈を言つて置く。

校友會うのものゝ狀況や、各地校友の消息、母校に於ける諸種の問題の報導、うれ等は何でもないやうなものでありながら、其實有意味なものである。殊に各地に散在して居る人々に取つて最も懷しく感せらるものである。

各人の眞率なる對自己、對社會、對人生對自然乃至對母校、對校友會、うれ等についての批判及感想を聞くことは、僕としては頗る嬉しいことに屬する。各校友諸兄がうの境遇及周囲から受けた、眞率にして誇張なき感想若しくは觀察を聞くことは、決して無意味なことではなからうと思ふ。實際それを通して各校友が如何なる生活を營みつゝありやを知り得ると同時に、うれによつて自己の生活を啓き進めることがまた決して少なくなからうと思ふ。かゝるとき眞面目なる討論批評なども自ら生じて、誌上に横溢する活氣が、期せずして發しはしないだらうかと思ふ。

これを要するに、岐蘇林友は單なる林學乃至林業の雜誌であるべきでなく。又才子達の戲筆場とすべきでもない。校友そのものゝ香のいや高い雜誌たらしめることによつて、始めて理想に近い機關雜誌たり得るといふ一事である。

以上極めて抽象的概念的、隨つて淺薄と不徹底との謗を免れないものとなり終つたが、この問題は此で打切つて、殘された他の問題に轉じよう。

終りに、これ等の問題について論究の勞を省き得ないのは、單に林友を發刊したのみで、うの林友が何等一般校友の上に意義らしい意義を附與することがなかつたならば、林友ひいて校友會に對し冷笑のやうな又反感のやうな一種不快な感情を抱かしめて、うの結果ある悲しむべき狀態に陷らなければならない事があるからである、之に反して林友が一般校友の上に意義と光とを投げたならば、校友會を愛する情の高められると同時に、會の結束を固うすることを得、目的なるものが完全に近く果されるものである。（未完）

感想

節穴から覗いて

神の子

○世間は魔に充ちて居る。青いのや赤いのや黄ろいのやら樣々な風態をして人を誘惑し壓迫し墮落化せしめつゝあるのだ。

うして彼等は常に吾々より大きい力も强い吾々も度々この魔の手の毒牙にかゝることがある。一度や二度は防禦出來るが然し三度四度となるともう効力がなくなつて了ふすると其の結果は誘惑せらるゝのだ。義理だ人情だと壓迫せられつゝ誘惑せらるゝのだ。恐ろしい!!實に恐ろしい!!

○魔は自分の信念で或る程度まで制禦する事が出來る、面白いものだ。優しく見せて食ひ込ませ最ういゝ加減の所で急に一變し逆に捩ぢ上げて背負投を一本ヤツとやつつけると奴さんは青くなつたり赤くなつたりもうられでた了ひだ。然しこの手段も考へものだ兎角こんな目に遇つた奴は直ぐと其の人の中傷に取りかゝる、仕樣がないもんで三人虎を成すの諺の樣に思はぬ迷惑が振りかゝる、信用本位の現代は中々油斷がならぬ。

○川の水は石に碎け巖に激して流れると共に其の音を發するものだ、人も事に際會して始めて眞價を發揮し激勵せらるゝものである昔の人も『憂きことの尙この土に積れかし』と歌つて艱難の事を身の修養と歡迎したものだ。『若い時の苦勞は買つてもしろ』と俗諺にも云はれて居る實にそうだ、若い時にさんざ苦しんだ位の者でなければ世の中へ出て役に立たぬ。成功者の大半は此の種の人だ努力と奮勵は吾人のモットウである。

○俺は世の中なんかろう考へ度くはない。考へれば考へる程社會がいやになつて了ふいくら一部の人が正義を叫んだつて、人道を唱へたつて血に飢えた肉塊と肉塊が間斷なく淺ましい爭を續けて居る修羅場が此の世の中なんだ。實際つまらぬものぢやないか。

○靜の中に默の中に强き大なる自己を造らう、これが俺の理想だ、笑ひ度い奴は勝手に笑へいくら俺が俺の僞らざる內心を告白したつて表現したつて眞面目に聞いて與れる人がないぢやないか。俺の對象は最早やい人でも無ければ社會でもないんだ。高山樗牛も『吾人は須らく現代を超越せざるべからず』と絶叫して居るぢやないか

神の子の目や耳には色々なものが見えるし又聞こへる、小さい學舍の節穴から覗いて居る社會でも隨分變なものだ、Beid see が小さいからこんな所だけ目につくかも知れぬ、何ちにしたつて社會はそんな美しいものぢやない九穢五濁といふじやないか。

神の子の目や耳には感ずる所が多い機があつたら又書かう、然し諸兄は俺の名を追究する事だけは許してくれ又記事も矛盾する事があるかも知れぬ然し偶感なのだから之も許して與れ

調査

南滿州旅行片々（其三）

在京城　本多清右衛門

四、旅順附近に於ける農林業

一、農業

當地方に於ける農業に就きては多くを知らざるも大連附近の農業と大差ながるべし故に記するの煩を避けんとす

三、林業

關東都督府に於ても朝鮮總督府に於けると同じく造林事業は旅順附近より初め他に漸次普及するの方針を取れるものの如し從て旅順に於ける造林事業は多少見るべきの資無きにしもあらざるも當時冬季休暇にて之れが調査を爲すこと能はず且つ材料等を集むること不可能事なるを以て詳細のことを記すること能はざるを最も遺憾とする所なり此に記する所のものは都督府技師磯田信之助氏の話に依るものと余の實地視察したる大樣とを總合して簡單に述ぶるに止めんとす

元來都督府管內の山野は殆ど一木を見ざる

禿山なるを以て利用方面は絕對になく單に造林事業のみなり造林は漸く明治四十一年頃より始めたるものにして現今十五六年生のアカマツ、クロマツの純林を点々見るも之は露國時代に於ける植栽地にして都督府に於ける植栽地は未だ七八年生のもの大部を占め居る有樣なり然れども市街地に面する部分は殆ど全部植栽終りたりと云ふも誤りなからん苗圃は旅順を去る一里楊樹溝にあり露國時代の跡を襲へたるものなり其の面積二十九町八反歩養苗樹種はアカマツ、クロマツ、ポプラ、ニセアカシヤ等を主としカラマツ其の他外國種二、三試驗的に養成し居るに過ぎず養苗數は百三十二萬本にて山出苗木は百十萬本なりと云ふ肥料は豆糟骨粉を使用し他の肥料は目今使用せざる趣きなり

本苗圃は主任技手一人雇員一人傭人二人之れが任に當り居れり

造林時季は春秋二季に施行し春は三月下旬より四月中秋は十月初めより十一月中旬頃に終了の豫定なり植付方法は六尺の正方形植樹穴は直徑一尺七寸深一尺二寸此の地方にて造林上他と異なるは植付の時水を使用することなり都督府にては一穴に平均約三合の割合にて水を使用すと云ふ人夫は全部支那人を使役し其の賃金は二十六錢一日植付苗木數二百本乃至二百五十本枯損步合約二割とせり造林の際水を使用するは土地の乾燥する結果なりと云ふ一般に造林地を見るに餘り好成蹟にあらざるものの如し之れ都督府技師の話に依れば土地の乾燥と冬季寒期酷烈なるが爲めなりと或は然らん而してニセアカシヤ、ポプラは主として行道樹宅地の周圍及公園等夏季の風致を添ふ所に植栽しつつあるものの如く其の他は全部アカマツ、クロマツを植栽せり

都督府管內に三ヶ所の苗圃を設置せり旅順大連金州之なり方針としては都會附近及水源地等特に急施を要する箇所を先きにし漸次田舍に及ぼすものの如く之れ時機に適したる處置なり要するに都督府の農林業は將來悲觀すべきにはあらざるも有望なるものにはあらざるべし

第三　奉天

一、沿革

奉天は瀋陽とも稱す唐朝以前は高句驪の領土にして高句驪以前は挹婁國なりしと云ふ瀋陽の名は元朝より始まり明は此の地に瀋陽中衛を置けり清の大祖長白山下に起り興京より遼東を征するや天命六年瀋陽及遼陽を陷し都を遼陽に奠め更に瀋陽に遷る大宗位に卽き興京に對して盛京と號し世祖都を燕京に遷すに及び奉天府を設け府尹を置き爾來奉天と稱するに至れり

二、位置

南滿州中央の大都會にして北緯四十一度五十分東經百二十三度三十五分に位置し地勢平坦にして一望無涯なり西に遼河あり南に渾河あり舟揖の便なきも安奉線東より來りて西京奉線に會し南滿鐵道南北に貫通して陸路交通の中樞を爲せり

一度歩を郊外に進めんか廣茫沃野無涯眞に大陸的の氣分を催ふされ『武藏野や雲より出でて雲に入る』關東平野の比にあらず遠く西北方に當り興嶺山脈延々長蛇の如く滿州無限の富を豐藏する當り情趣悠然たるを覺へしむ

三、氣候

大陸的にして寒さに强く暑に强し測候所の調査する所によれば結水期は概ね十月末にして翌年四月末又は五月初めに於て解氷し極寒攝氏零度以下二十三度前後に降り酷暑攝氏九十四度前後に昇るされど家屋の構造は一般に煉瓦又は土壁を用ふるにより冬季室內にありて適當に溫度を保ち夏季亦相應の涼氣あり只だ春秋二季に於ける西南風は時々濛々たる萬里の土砂を吹き捲き黃塵萬丈の奇觀を呈することあり

四、人口

大正三年六月末現在內外人戶口數左の如し

支那人	三四、九六四戶	一九五、三三七人	
日本人	一、六〇二戶	六、一二七人	
朝鮮人		三〇八人	
外國人	四六戶	一六七人	
	六五戶		
計	三六、六七七戶	二〇一、九三九人	

五、貿易

奉天は滿州に於ける中央都市なるを以て之れを中心として集散する農産物數量を示せば左の如し

大豆　二十萬石　全部輸出さる
豆粕　八十萬枚　原料大豆約十五萬石全部輸出
高粱　二十萬石　奉天の消費高
粟　十萬擔　重に朝鮮に輸出す
稗　十萬擔　重に朝鮮に輸出す
麥　八千石　奉天消費高
陸稻　三萬石　奉天消費高
煙草　壹千萬斤　一部は奉天消費一部は直隷山東方面に輸出す
麻　百五十萬斤　內五十萬斤は輸出
藍靛　三十萬斤　奉天消費高
茸　十二萬斤　奉天消費高
蜂蜜　三萬斤　一部を輸出す
藥材　四十萬斤　一部を輸出す
皮革　十萬枚　一部を輸出す

奉天市場より日本其の他の海外へ輸出さるる商品は大豆豆粕等を除くの外殆ど云ふに足らず而し近日輸入品は滿蒙開發につれ著しく增加し來り將來奉天の輸入商品は確に滿蒙供給の中堅となるべく滿州の經濟狀態に多大の變化を與ふるに至るべし主なる輸入品は綿糸、綿織物、綿布、綿花、紙、砂糖、酒、食料品、メリヤス、日用雜貨、文房具、藥品、鹽、魚類、海草、陶磁器、金屬原料、金屬製品等にして現在に於ては輸出入合計約二千五百萬圓の貿易を爲すに過ぎずと雖將來地方の益々開發し農產額の增進を見るに至らば殆ど無限の需給干係を生すべく奉天貿易の前途や洵に多望なりと云ふべし

六、名所古蹟

一、宮殿

奉天唯一の古蹟にして宮殿は金鑾殿を稱し清の崇德二年（西暦一六三七年）の建造に係り清の太祖高皇帝竝に太祖文皇帝の宮居せし所なり余は當時日數に制限され參觀の餘裕なく詳細を書する能はざるを遺憾とす

二、東陵

東陵は一名福陵とも稱し奉天城東二十支那里約三里にあり太祖高皇帝の陵たり

三、北陵

北陵は別名黑陵と云ふ奉天城の西北十支那里約一里半にあり太祖文皇帝の寢陵にして清の崇德八年（西暦一六四二年）に成る全陵松樹鬱蒼とし春夏二季に於ける土塵濛々たる奉天の唯一清涼地たり陵外の森林は周圍里餘に達し林間の李花は正に奉天の春を獨占し故を以て花見時の雜沓は上野飛鳥山にも劣らざる盛況を呈すと云ふ亦日露戰役の古戰場にして露軍此の森林に依り猛偉を奮ひ我軍苦戰したる處たり而して此の森林たる滿洲平野に稀に見るの大森林にして老樹鬱蒼書尙闇きの感あり樹種はマンシウアカマツ及雜木林を爲せり

四、寺塔

奉天は舊都たけ夫れたけ城內外古蹟に富み一々列記するの煩を避けんと欲す北陵よりの歸途見又は聞きもせしものを物し此の稿を終らんとす

北陵と奉天城北門との中間村落に法輪寺あり營國塔高く天に沖す又附近に長寧寺あり天地佛の喇嘛尊像を以て名あり小西邊門外には雲寺あり蒙古喇嘛の大喇嘛を座主とし清朝歸依の勅建寺たり又鐵道附屬地の附近に西塔あり奉天等護四塔の一なり其の他城內外に寺院頗る多く孔子廟城隍廟は何れも城內にあり奉天守護四塔は城の東西南北にありて磚瓦剝脫し古色蒼然徐ろに舊都の遺物たるを偲ばしむ。（完）

附言　滿州旅行記は一先づ之れにて完結し滿州の林業に就ては尙研究し他日稿を改めて述ぶることせり以上暫く林誌の一隅を借り掲載せし處單に其の一端を物せしに過ぎずと雖も他日南滿地方に遊ぶ者の多少なりとも參考とならば余の最も幸甚とする所なり朝鮮忠淸南道燕岐郡全義面邑內里全義出張先一旅宿佐野の二階四疊半に座し午后十一時梅雨軒を打つ音をきゝつゝ（本多生）

白髮山保護林

附白髮官行作業の現況

南海の山にて　小咲生

蜜柑のなる國へ來てから早八ヶ月其間母校を幾度思ひ出せしにや一所に渡つたO君M君とは文通を絕つまでも面會する期だになし去る十二月中旬先輩南村兄に面會せる時と丁度余が白髮山保護林に每木調査中であつた、山の子はやはり山で遇ふといふ樣な定義も發見した、その頃から連續して今尙數名の人夫と共に調査に餘念なし折しも雨天續き公務の餘暇を利用して校友諸兄に紹介せんとす

我が本山小林區署管內左記の箇所は御大典記念として四國唯一否天下の保護林となれり吾等の責任重且大なり

町村名	大字	字	面積	林班	小班
吉野村	七戸	白髮山	八七町八八	二二	ろ
同	同	奧白髮山	七七 八二	二四	に
同	同	同	三七四二四		は
本山町	上關	午旁谷山	三四二三九	い	
同	同	同	二四四六三九	ろ	
同	同	同	二〇二四〇	い	
同	同	同	二四五四三	い	
計			二〇一八二		

本箇所は總稱白髮山に屬し石槌山系の主脈より南に分岐し土佐國長岡郡本山町と吉野村との境界をなす吉野川（四國三郡の稱ある）流域に屬し頂上には陸軍三角點あり海拔四千八百餘尺群峰の間に頭角を顯はし本區域を鬱蒼たる扁柏の一齊林にして最も美觀を呈せす

地況東南面は午旁谷山西南は口白髮山北面は奧白髮山に連り地勢概して東南西の三面は急に北面は緩なり其急峻なる部分にありては主要基岩たる結晶片麻岩の大なるもの突兀として聳立すること數丈に及び小なるものは累々として集合す其岩塊の滿面蘚苔を以て厚く蓋はれ樹根其間に錯綜するが爲め地表柔軟にして恰も海綿を履むに異らず若し蘚苔に蓋はれたる岩隙に歩を進めんか忽ち失脚して枝亦用をなさざる事あり緩斜地にありては土壤淺く所々に水流ありて蘚苔の附着したる岩塊多し從來是等の地域を劃して施業制限地となせり

林況人もし白髮山に登山を試みんか其下部に於て近傍の山岳林と同樣普通の針濶混淆林を見るなきも地況の變化と共に林況頓に一變するに一驚を喫すべし是より以上は白髮事業區施業制限地の區域に屬し眼界に入るもの悉く鬱蒼たる一齊の扁柏林ならざるはなし尙登るに從ひ次第に五葉松栂等を混淆するも其數に於て固より扁柏に匹敵すべくもあらず

北面及び頸腹部は樹幹矗立宛然人工林の如く一見材質の美を偲ばしむ其最大級に屬するもの直徑二尺內外高さ百尺に達し樹齡百五十乃至二百を算すべし其下木としては唯僅かに石楠の存在するを見るのみ又小局部には濃葉樹林の斑紋をなすあり林中の鬱閉少しく破れ陽光の漏る所には彼所に一團此所に一群の稚樹簇生し乘ずべきの間隙を覗ひて徐々に成長し以て鬱閉を保持しつゝあり太平洋に面する南東方に至りては地勢急峻にして樹木は岩塊の上に成立し絕えず强風に襲はれ生育完からず百數十年を經て樹高僅かに三四間直徑數寸を出でず梢端は梳るが如くに枯れ幹枝の曲折千態萬狀愈出でゝ愈妙天下の盆栽樹を一山に集めたるの觀あり其間所々に巖頭を露出し天然の一大庭園を形成す

保護林設定區域は大体に於て從來の施業制限地を限りたるも其局部の境界に小面積の異動を來せしは可成天然の地形と林相の異同とに基き之を分劃し以て將來永久に其區域の判明を有したるに外ならず

由來四國の山岳林には扁柏の良材乏しからずと雖も多くは他の樹種と混淆し本地の如き大面積の純林あることなし殊に高峰の山頂部も磊々たる岩塊の上に一大美林を形成するが如きは蓋し學術上又は施業上の研究材料として好箇のものたるべく且つや本林の如き一度斧鉞を加へなば再び現在の如き林相の成立は期し難き個所なるを以て之を保護林に編入し將來保護管理を嚴重にして火災を豫防し枯損木の外は伐採を爲さず天然の稚樹を撫育し以て其効果を完ふせんとするにあり白髮山の名稱は山麓に鎭座せる白髮神社に由來し本區治內には石槌神社の奧院と稱する小堂宇を存し且つは眺望佳なるを以つて古來登山者多く地方人は一の靈場として崇敬し土佐の名山として知らる又白髮山產扁柏は其材質美良にして吉野川流

域一帶より產出せる木材に對し特に白髮材と稱し關西地方に聲價を轟かせし事歷を有する點より考ふるも保護林に編入するの必要ある趣旨より今回保護林として此の原生林を學術及森林施業上の考証とするにあり若し林學者地學者動物學者工學者哲學者文學者醫學者乃至騷人墨客の白髮山に登山することあらば蓋し發明する所あるべし。

余此の山に登山すること十數回常に山色の特に濕ひ溫雅幽邃森閑として之に棲む禽虫は趣を添へ自然のは膏雨と爭ひ辛くも枯死を免れ千古の林相を維持し來れる處女林の貴さ神々しさ全身に充滿し精神の壯快を感せしむ。

北面下部に白髮官行研伐作業所あり數多の樵夫炭燒夫の寢食する小家と事務所及供給店等あり保護林に連續せる個所は大正五年度及大正六年度の研伐個所にして附近迄木馬道によりて下ること一里餘冬之瀨土場に至る此の所に提唯吉氏經營に係る木工場あり原料を官行材に需め水力によりて專らスコップ柄ショベル柄の作製をなし製品は大阪地方に供給しつゝあり。

尙小木工者あり或は下駄を作製し或は挽物をなし盛曹製造に從事するものあり皆原料を間接直接官行材に仰ぐものなり。

冬之瀨土場は軌道の始點木馬道の終點にして汗見川に浴ひて二里二十六町の軌道あり吉野川河岸汗見土場に終る此の軌道は今回機關車（中屋某發明）を利用してトロリー運搬を開始せんとしつゝあり。

白髮官行作業所は其事業甚だ複雜にして扁柏樹五葉松欅等の材は伐木造材に當て年々研伐材積三万石前後に達す山毛欅シデモウカ櫻等の濶葉樹の未木は製炭原料に當てつゝあり。

官行製炭事業は本年度より着手せるものにして海岸地方製品と對抗して決して劣ることなし尙製炭附屬事業として醋酸石灰製造を開始す其製品は高知市場相場一貫目六拾七錢にして約七十五％の醋酸を含有するものなりとかくの如く

古人の夢だに思はざりし白髮深山も文明の空氣に滿ち各種事業は益々進步發展の機運に向ひつゝあり醋酸石灰製造は十月より開始せるものにして成績次の如し

期間	醋酸石灰	一石當	一石當	一石當	木酸液	同運搬	同製造	同燃料	計
		賣價	賣價	燃料賣價	一貫目取扱賣價	賣價	賣價	賣價	
拾月	二、七六六	一、六〇〇	一、二四〇	不明	円 0.0九	円 0.0六五	円 0.0六八	円 二、三七	
拾壹月	二、六〇〇	一、三四〇	0.0一五	0.0一九	0.0四	0.0四	0.0三五	二、二八	
拾貳月	二、六九〇	一、三四〇	0.0一一	0.0一六	0.0四	0.0四	0.0三二	二、二八	

但し石灰一貫目五錢

山元より製品運搬一貫目三錢五厘

醋酸石灰一貫目の市場相場六十七錢なりと

尙小林區署の現狀其他の參考となるべき事ども折を見て通信することゝして拙劣なる文章を以て貴重なる紙面を汚せし事を茲に陳謝す。（完）

文苑

誓程一千日（其二）

於長野市　曾山子

瀧は知るまい眞砂の月を
映じながらも散り〳〵に。
夕立の雲の晴間にあらはれて
なごりとゝろく瀧の音かな。
夏寒き瀧の谺や山深し。
嗚呼又閑谷の幽、仙境の邃、轉た恍惚！
燈百穗瀧殿に御會ありにけり。
瀧殿に河鹿きゝ寢や月を見る。
避暑客に瀧の別墅は借られけり。

又近頃の萬朝報の小品文に

旱に痩せ衰へた瀧も幾日かの雨を得て素晴らしい勢を以て奔流し初めた、巖が鳴つて水が飛んで底の小石がさも嬉しさうに轉げて行く、崖の青葉は快く風に戰いて梅雨晴れの日が美しい虹を產んだ、水は谷へ川へ旱田へと一散に走つて居る。

夏の瀧、其響音百雷の囂々たるナイヤガラの夫れの如く、颯颯金澤市翠瀧の如き、淙々漠々ライン瀑布、伊豫岩堰の如き、滝々吉野十津川七色十二倉瀧の如き、鏘々耶馬溪三尾母瀧の如き、潺々涓々飛驒乘政の瀑の如き、將復、滝々箱根十條瀧の如き……

……夜深く涼風田の面を戰ぎ庭前の風鈴琴聲

を漏す時遠く南北幾百里外の名瀧を点綴するアルバムを展く時何物の銷夏劑か此の間の爽感に超ゆるものあらんやを思はしむ

曩に我敬愛せる諸君より寄せられたる美瀧を其幾十百里外無音の響に依りて別ちたる七種につき聊か諸君の一瞥を乞はん乎

A、轟々（雷響）＝ナイヤガラ瀑布、羽前雷神瀧、沖縄名護轟瀑、河蘇鮎返りの瀧、出雲杉笠龍頭ケ瀧、水曾田立天河瀧、上高井山田雷瀧、

B、颯颯＝飛驒平湯の大瀧、秋田十丈瀧、金澤市翠瀧、輕井澤小瀨の瀧、赤石山高石山の瀧、平岡精進の瀧、木曾田立雨相ケ瀧同螺旋瀧、御嶽清瀧、駒ケ岳敬神瀧、小野瀧、王子名主瀧、米子不動瀧、澁淵滿瀧、十二社瀧、北安曇尾丸瀧、

C、淙々濤々＝ライン瀑布、甲州瑞富怒瀧伊豫石平川上岩堰瀧、上高井米子王籠の瀧、下高井澁幕岩の瀧、

D、滝々＝奥國無名瀧、近江梅の瀧、伊豫面河溪、同石平川湧淵、吉野十津川七色十三倉瀧、日光瀧頭瀧、木曾田立不動瀧、同鳳來山瀧、同丸淵の瀧、同瀧ケ瀬瀧、

E、鏘々＝耶馬溪猿飛の瀧、同三尾母瀧、神戸布引瀧、紀州那智瀧、觀見花月園の瀧、美濃養老瀧、佐渡十郎瀧、碓氷峠女瀧、同男瀧、上州鹿澤の瀧、上高井米子權現瀧、下高井安代黑川瀧、同峠の瀧、

F、潺々涓々＝伊豫白猪の瀧、飛驒乘政の瀑、諏訪多留姫瀧、

G、滝々＝豐後女瀧湯、伊豫河の內唐岬の瀧、美濃妙法ケ瀧、箱根千條瀧、同白糸瀧、王垂の瀧、上州萬座亂麻瀧、下伊那不動瀧、上高井柄澤の瀧、

百雷の響も聞かず瀧の音
飛ぶ霧に青葉搖ぎて谷涼し

八月七日　夕

山、山、山、（下ノ上）

岩田生

（旅行日記の中より）

●高野山●＝「今日は學生が登るから雨が降るだらう」と、麓にて里人の語るを聞く、蓋し學生の中には山に登りて千歲の神祕を汚瀆し或は聖靈に對して科學的冷評を敢て試みて得意然たる者尠からざるより即ち學生が登れば所謂御山が暴れるとの謂ならん、到る處に優遇を受ける學生團体も抹香臭き處にては斯く小偶像破壞者の集團と目されるだらう」と、麓にて里人の語るを聞く、蓋し學生の中には山に登りて千歲の神祕を汚瀆し或は聖靈に對して科學的冷評を敢て試みて得意然たる者尠からざるより即ち學生が登れば所謂御山が暴れるとの謂ならん、到る處に優遇を受ける學生團体も抹香臭き處にては斯く小偶像破壞者の集團と目されるなり。

多くは冷遇さるるも已むを得ざるなり。

昔は登りて谷を蒙りし女人今は登りて御利益ありと變れば變る世の中なり。壯なる者は言ふも更なり隣家を訪ゝさへ物憂き霧嵐を無上の樂土に遊ぶ思せしめて日々幾百となく引き上ぐる其の力、峻坂函谷を隔つる二千尺の頂に壯麗な堂坊、無數の石碑般若なる町、鐵索等の建設されし誘因に想到して、信仰の力の偉大なると祖師の靈光とに吃驚せずんばあらざりき、高野口を朝六時に出發し午後四時に此處に歸る豫定なれば四里餘りを十時間に往復せざるべからずされば當山の林況、軌道運材、苗圃等を仔細に視察すること能はず殆んど駈足にて上下せしを以て健脚を以て自任せる一行も身体綿の如く疲れたり、

麓に到りし頃果して山頂の方に黑雲起り雷轟けり、遂に吾等を小偶像破壞者たるを免れ得ざりし。

身体綿の如く疲れて高野口より和歌山市に到る車中は大方は夢なり、偶々夢より覺めれば汽車は悠々たる吉野川の岸を走れり、昨日の此川は石に堰かれ岩に碎かれ山に沮まれし憔悴たる溪流なりしが此處に出でゝは石も岩も山も森も亦大空をも悉く其底に沈め其面に浸し悠々とし沈靜の大洋に向へり。

河溪の翹望は平和の大海なり、我等が一の目的點に達せんとするに當りてや先づ溪流の如く何物とも衝突し爭鬪する勇なかるべからず、而して又大河の如く其進路を沮碍せんとする何物をも抱擁し融合する襟度なかるべからず、

●和歌山●＝市の近郊には●名草山●、●龍山●、●伽羅山●など和歌にも詠みたき山々多けれど如何にせん登りて見ればとて無風流なる頭には

和歌一つ浮はざるを、たゞ店頭の一山いくらの本場蜜柑が芳香を放ちて盛に唾線を刺すのみ、流石は蜜柑の本場味佳きと價廉きとに朝目醒めて見れば一行の安き眠の枕頭には皮が堆く山をなせり。和歌山を辭して將に大阪市に入らんとする時電車の中より雨霧に包まれし生駒山を望みたるを限りに暫時山と別れぬ

艶麗なる大都會の事物は先づ第一に無味乾燥なる山里—當時思へる—の居に倦める吾等の心を唆りて連りに都會生活を羨望せしめたり、されど電車の昇降に爭ひ、顧客の吸收に爭ひ、勞働に爭ひ、學問に相爭ふ、即ち都會人の一擧一動は悉く之れ名と金との爲めの爭鬪なりと思惟され再び幽玄なる山住を慕ふ念勃然として起りぬ。二日間の滯在に華美なる皮想の文明に對する憧憬の念と、生存の苦鬪に呻吟する內面に對する憎惡の念とは交々吾等を刺戟し眩惑せり

(大阪市の空を遠望し仁德天皇の御德を慕し奉りて)

うのかみは惠に立ちし細煙
今ぞゆたかに空焦すなる

大阪を出でてより播但線に移る迄は取り出でて書く山もなく且つ沿道の風光明媚なる長汀曲浦に恍惚れて山山の記を忘れ了んぬ

第二學年修學旅行日記(承前)

五月十八日 木曜日 下嶋俊二

明くれば十八日三日の間親しみ馴れし東都に別るゝ日とはなりぬ折りしも前日より降も續きたる雨なほ止まずされ共實習にて鍛へ上げたる蘇校の健兒は此ばかりの事に意氣の屈する者なく勇みに勇みて旭樓に別れをつげ午前五時半の電車にて万世橋を出發す電車は異樣なる響をあげて發車し町々を縫ひ走り參拾分許にして新宿驛に到着す此處に待つこと約一時間許川越行の列車に身を移し航空隊の所在地なる所澤に向つて發車せり此の列車は私設なるを以て車体車內の設備など不完全なるのみならず速力も至つて遲し然れども此の交通不便なる地方にありては重要の交通機關なり漸くにして所澤驛に着す此の時は既に降りしきりたる雨も小降りとなり風も和ぎ天氣全く快晴にならんとする模樣なれば飛行機の下界を見下しつゝ雄々しく飛ぶ姿も見得るならんと一同大いに喜び且つ足の運びも自づと早くなれり行く事十町許にして到着す見渡す飛行場は青々としたる短かき草を以て掩はれ廣々として限なし軈て飛行中尉が格納庫に案內せられ飛行機の側に立ち構造せられたる由來昇る理由操縱の方法など明瞭なる言葉を以て詳しく說明せられたれば此の上は彼の飛行場に於て飛翔する委を仰げば最早滿足の至りと思ひ居たりしに殘念なるかな小降りとなりし雨は風を加へて吹き來れば吾等一同の望みも水の泡とはなれりそれより中尉に別れをつげ來りし道を戻り所澤驛にて乘車し甘諸の名所なる川越驛に下車し暫くして電車に乘換へ大宮停留所に到着此處より日光行の列車に身を投ず午後五時日光驛に着し神山館に投宿す

五月拾九日 金曜日 横井正守

嗚呼天は無情なるかな、夜來の雨は未だやまず。一行は只茫然として、顏を見合はすのみ、七時旅裝をとゝのへ、旅館を後に、朱塗の神橋を傍に見つゝ大谷川を渡る。水は清く、谷は深く橋下の激流は時ならぬ白雪を飛ばし、水聲は潺々として、淵底に鳴り幽邃なる風光人をして行路の難を忘れしむ。かくて東照宮にいたる、社殿は、規模宏壯にして、山水花鳥を彫刻し、金銀珠玉を鏤め、光輝燦然として、人目を射る。殊に陽明門にいたりては結構壯麗を極め、實に善美の極を盡せり。それより奧殿にいたり、一同參拜し引き返して、德川一代將軍並二代將軍の墓を拜し、歸途門前に於て、五重の塔を前にひかへ、記念の撮影をなし歩を移して寶物館を見、二荒神社に參拜し中禪寺湖に向ふ。田母澤の御用邸を左に拜し行く事數町にして、追分にいたる、一は裏見瀧に一つはたゞちに中禪寺に向ふ、道はやゝ急坂なれども、馬返しより中禪寺湖までは、車馬の便あり、吾等は今日こゝ、日頃練り鍛へたる健脚を示さんと欲し舊道を辿る、其の里程の近き事新道に比して三

分ノ一なり。かくて頂上に着し天下の名瀑華嚴瀧にいたる、是れ即ち大谷川の上流にして瀑の高さ七十丈、恰も是れ銀河の九天より下るが如く、下半に至りて往々峭巖に觸れ、飛沫四散して雲霧を起し水柱潭底に漲り落つれば、獅吼雷擊、山鳴り、谷應へ、天柱も摧け地維も缺くるかと疑はしむ壯烈豪宕誠に喜ぶべし、觀瀑を終りて、歸路につき中禪寺湖畔に出づ、雲は低う湖面を覆ひて、眺望十分ならざれども、かゝるところに又一入奧ゆかしき感あり、折しも歸鴉數聲頭上に叫び憂として天空を橫ざり向ひの山には入らずして、尙其の西夕照の間に遠く〳〵飛び行きぬ、余は其の影の愈々小に今や山の端より繰り出す亂麻の如き暮雲の裡に、消ゆるまで目送しぬ。

五月二十日 土曜日 小林右內

目覺めて湖のほとりに出づれば曉風颯と面を拂ひ山氣透徹心神自ら爽かなるを覺ゆ湖面は靜かに水は清く〳〵澄み渡り四圍の山は高く低く影を涵し男体山特に天を摩せり心ゆくばかり晴れたる空には弦月一痕寂しげに釣られ波光瀲灩併せて湖月の勝を領す周圍の萬象悉く眠るが如く沈靜閑寂飽くまで神祕的美を現はせり湖は又其名を幸の湖と云ふ先帝陛下御幸の御跡ぞ戀しき一同朝餉すまして出發の準備をさ〳〵怠りなし早くも五艘の小舸は岸に用意されたれば吾々は頻と膝を接して乘りぬ間もなく解纜されたる小舸は或は先になり後になり波を蹴て行く咿軋たる櫓聲も心地よく笑ふあり歌ふあり皆喜色面に滿つ右手に浮べる土野嶋は進むに從て定かとなり枝ぶり悪しからぬ松生へる一入湖の眺望を添へね間もなく舟は岸に引きつけられたり舟を捨てたる一行は足尾目指して直ちに峠にかゝりぬ道急坂にて魚貫して登ること約半道にて頂上に達す霧深うして遠望叶はねども惡臭の鼻を衝くを覺ゆ附近の山はと見れば山骨露はに林地の荒廢著しく一木だに認むる能はず此れ見るだに毒々しき亞硫酸瓦斯の障害にして實に森林の大敵なり鑛山近うなれば荒凉慘憺益々甚しく臭氣愈々强し所々に砂防工等施して纔かに土砂の流出を防げり漸くにして足尾に達す我々の先輩某氏の案內にて銅山を視察す先づ坑口より運搬の狀況、鑛石の分類溶鑛爐精錬場成形所等僅か數時間前には一つの石塊に過ぎざりし物がやがては立派なる純銅となるまでの順序を隈なく見終へて茲を辭し十一時汽笛一聲間藤驛を發す汽車は赤城山麓を縫ひたる渡良瀨川に沿ひて下る原向驛に到れば展望稍々開け程なく桐生驛に着きねこゝにて足尾線を捨て兩毛線に乘り換ふ窓外は見渡す限り綠圃坦々として樹間に隱見する白壁頗る配合の妙を得たり只遙かに雲のかゝりて妙義榛名の雄峯を見ざるを遺憾とするのみ前橋高崎を過ぐれば山愈々近く巍々として車窓を壓す碓氷の險にかゝりし頃は最早物のあやめもわかずなりぬ入りしかと思へば出で出でしかと思へば又入る忽ち暗忽ち明一時間餘にして廿六晝夜あり避暑地として其名世に隱れなき輕井澤も蠶絲業の中心たる上田も白河夜舟で打ち越ね長野驛にと着きたる一行は藤屋旅館に到り始めて靴の紐を解きぬ時恰も午後十時なりき

五月廿一日 日曜日 唐澤繁夫

樂しき旅行も今日一日とはなりぬ午前六時最終の逆旅の夢破れし一同は今更乍ら疲れし旅寢の夢を口々に戀うるもをかし七時旅館を辭したる一行は先づ善光寺に詣づ本尊は本邦有數の古刹にして堂塔伽藍色褪め果てたれど規模宏壯にもていと崇嚴なりされば善男善女の慕ひて參拜するもの引きもきらず梵鐘の音讀經の聲日夜止む時なし堂前鳩の嬉戲する風情を眺めつゝ去つて城山公園に到る木石の雅趣少なしと雖も雲表を拔く吾妻山に對し信濃川は蜒蜿として銀箭を放ちて一望十里の蒼溟に向ひ市中亦眼下に俯瞰する事を得眺望極めて佳なり

一行は暫時休憩の後道を轉じて急坂數町刈萱堂に到り磴を躡みて石童丸が墓を弔へば高野の山に父を尋ねて艱難困苦せし可憐なる彼が昔語りなど忍ばれて不遇なる親子に同情の涙轉たしげかりき夫より貯水池等の參觀をなして解散を許されしかば自がし長野の市中を彷徨せしが午前十一時半には

停車場に集合午後零時二十五分の列車に投じて歸途に付く今にして思へば長かりし一旬の旅も一瞬の幻の如く覺えて長野の市中にも深く名殘は惜まれつ然れ共汽車は容赦なく滿目霞める鮮綠の平野を南に驀進し四五の驛は瞬く間に過ぎて早姥捨驛に着しぬ此處は觀月の賞地として古より名聲を馳せし所眸を窓外に轉ずれば前方には其の名に負へる麗しき鏡臺山を望み北方には千曲川の河水溶々として川中島に連り眼下には觀月堂有り亦巨軀人を呑まむとする如き姥捨岩と稱する岩石の屹立する有りて心はそゞろに空明の月夜皎々たる滿天の清光を浴びつゝ田毎にうつる月の景を思ひ浮べ暫し瞑想に耽りぬ間も無く汽車は本邦第二の隧道冠着を通過し行く〳〵東川手村附近の林地荒廢湖澤及地辷狀態砂防工等を眺めつゝ本縣第二の町商業の中心地たる松本市に着す先づ衆目を惹くものは松本城にして巍然として中空に聳ゆるを見る嗚呼戸田氏去つて茲に五十年城郭は昔の儘なる形を殘せども松吹く風は颯々として怨みを含むに似て遊子の胸にうゝろ哀感を催さしむ松本を去る二里にして松林の斷續する一帶の平野を桔梗ケ原とす天文年間深志城主（松本城）小笠原長時武田信玄と戰ひて大敗せし古戰場なり夫より鹽尻にて乘換へ木曾路に入り暮色蒼然たる須福嶋驛に到着すれば校長先生を始め諸先生及一年生諸君の出迎有り互に無事を祝しつゝ停車場にて解散を行ひ各自家路に向ひぬ。（完）

和歌

松下郡長の送別會にて　安井正夫

わかれて後もくまんとぞたもふ
かねて知る松下水の清ければ

雜報

學校記事

○登山隊無事歸校　七月廿七日（二年生は廿八日より）廿九日にかけて決行せられたる二年生の御嶽駒ケ岳登山は道中無事廿九日午後夫々歸校せるが駒ケ岳は山頂非常の暴風雨なりし爲大原下山を中止し再び上松に出で歸校せり因に付添職員御嶽は西澤福山、加藤の諸先生、駒岳は校長、宮川、大場の諸先生なりき

○宮川敎諭出張　宮川敎諭は八月十三、四の兩日松本女子師範に開催の信濃博物學會講演會及協議會に出席の爲松本に出張せり

○七宮校長出張　七宮校長は八月十八日より二十日まで山林視察の爲木曾御料林王瀧出張所管内鰍川伐木所に出張せり

會員消息

○渡邊知則君　朝鮮江原道楊口郡廳に轉任

○加藤正次君　昨冬一年志願兵として横須賀重砲兵第二聯隊第三中隊に入營せる同氏は今回上等兵に昇級せり

○柳澤熊治君　今回圖南の雄志を抱きてボルネオ島に渡航せらるゝ筈にて七月中母校を訪問せらる

○伊藤喜代君　長野縣林務課に轉任

○中川源太君　南佐久郡臼田小林區署雇に任せらる

○飯沼要人君　高崎小林區署に轉任

○篠原忠治君　靜岡縣周智郡氣多村川上分擔區に轉任

○古畑秋藏君　帝林管理局甲府出張所に轉勤

○酒井光義君の訃　酒井光義君は大阪大林區署に勤務中近來餘暇を以て關西大學に學び孜々刻勵大成を期する所ありしが七月下旬不幸熱病に罹され入院中八月十九日嚴父の手厚き看護も其効なく午後十二時遂に溘焉長逝せらるる誠に痛惜に堪へず茲に謹んで哀悼の意を表す

○市岡新八君　靜岡縣帝林管理局河津出張所に轉任

○賜暇　其他を利用して最近母校を訪問されたる諸君左の如し

千村吉雄君、今井欽君、吉川眞夫君、柳澤熊治君、伊藤喜代君

○本會及び職員宛署中見舞狀を寄せられたる諸君に對し左に芳名を掲げ謹んで感謝の意を表す

飯沼要人君、古畑秋藏君、伊藤喜代君、都竹武次郎君、大場先生、鹽川金次君、加茂憲太郎君、大瀨房人君、柘植五郎君、藤原幾喜君、北村先生、千村彌之助君、下平佑門君、大坪時治君、牧部覺明君、田内田新之助君、藤田要吾君、林森君、近善右衛門君、新田穣君、篠原昇士君、千村万三君、關琴義君、小羽根安治君、新井彌藏君、原惠治君、稻葉增吉君、柳澤義雄君、古山五八君、荻原治君、上田彌太郎君

寄贈書目

新潟縣山林會報第五號　宇佐美周紫
名古屋木材月報第六十一號六十二號　名古屋材木商組合
岐阜縣山林會報第十六號　岐阜縣山林會
北聽農林第五卷七號八號　新潟縣立加茂農林學校校友會
農林新報第九十號　奈良縣立農林學校校友會

林友代領收報告

金壹圓四拾八錢　柳澤熊治君
金貳圓　石坂季治君
金壹圓　北川信美君

大正五年八月廿三日印刷
大正五年八月廿五日發行
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人　安井正夫
長野市西後町丙二十一番地
印刷者　田中彌助
長野市西後町乙二十一番地
印刷所　長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　澤書店